

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月5日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02790

研究課題名(和文)日本語学習者と対話する一般の日本語母語話者を支援するための研究

研究課題名(英文) A study on supporting native speakers of Japanese who converse with non-native speakers of Japanese

研究代表者

伊藤 美紀(伊藤横山美紀)(Ito, Miki Yokoyama)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00325903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、外国人と対話する日本語母語話者を支援することを目的としている。本研究では、日本語母語話者による観光用展示物のやさしい日本語への書き換え活動を行い、書き換えの特徴および、日本語母語話者が書き換えから学んだことを考察した。本研究課題で行ってきた書き換え活動は、日本語教員をはじめとした、言語調整が必要な人材の養成に有効であることと同時に、観光場面では、地域で活躍する人材の養成にもつながることを示すことができた。さらに、地域の多様な現場での運用を行いつつ、書き換えマニュアルを具体化し、より多様な人々がやさしい日本語を活用できる環境を構築することが今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はより多くの一般の日本語母語話者の日本語を用いた外国人との関わりを促進することを目指しており、日本語母語話者が日本語非母語話者と日本語でコミュニケーションを行う際に生じ得る問題を扱ってきた。また、本研究で開発した支援システムを用いて産出を試みてきたやさしい日本語は、日本語教育に従事する研究者が作りあげたものではなく、日本語母語話者が作成してきたという点も、注目すべき特徴である。

多文化共生社会において日本人と外国人が信頼関係を築き、相互理解を深めるために、このような日本人からの働きかけを促すことは有意義であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study examines how Japanese native speakers could be effectively supported while paraphrasing activities carried out for non-native Japanese speakers. This study conducted paraphrasing activities by native speakers of Japanese and analyzed the data both from linguistic and educational perspectives. The findings of this study shows that these paraphrasing activities can work effectively as one of the learning activities for students enrolled in the Japanese language teacher training program. In addition, it also implies that these paraphrasing activities may help people in general who would like to interact with international tourists more actively. Future research is expected to focus on developing a system so that general Japanese native speakers can participate in paraphrasing activities more freely, and can communicate with Japanese non-native speakers in various social contexts.

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教員養成 日本語教師教育 書き換え やさしい日本語 観光 学び

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

これからの日本語教育について考える時、日本語教師と日本語学習者が日本語運用能力向上のために努力するだけでなく、これまで日本語教育とほとんど関わりがなかった一般の日本語母語話者にも何等かの働きかけを行っていく必要がある。

日本国内における地域の外国人支援には「多言語対応」があるが、日本語による支援も存在する。「減災EJ」や「簡略日本語」や、補償教育としての「やさしい日本語」である(佐藤 2004、庵他 2013 等)。本研究における「やさしい日本語」も、補償教育としての「やさしい日本語」に基づくものとするが、本研究では日本語教育経験が皆無あるいは同経験が少ない日本語母語話者による日本語調整も支援するという点に特徴がある。

### 2. 研究の目的

本研究では、外国人と対話を行う日本語母語話者を支援する。はじめに、日本語母語話者が「やさしくわかりやすい日本語」を作成するための支援システムを活用し、日本語母語話者と日本語学習者との間の日本語対話を促進させることを試みる。扱う場面は、これまで筆者らが取り組んできた日本語教師教育場面に加え、観光場面での支援を行い、考察する。最終的に、より多くの日本語母語話者が、やさしい日本語という選択肢を含め、コミュニケーション方法を工夫しながら多様な母語をもつ外国人とより少ないストレスで楽しく対話できる環境を構築することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、これまで筆者らが開発し運用してきたやさしい日本語作成支援システム「これやさしいか」の速度向上にかかわる拡張開発を行ったうえで、本支援システムを活用した日本語母語話者による書き換え活動を実践し、分析を行った。書き換え活動によって得られたデータは、認知言語学および学びの観点から分析した。

平成 28 年度は、やさしい日本語作成支援システム「これやさしいか」の拡張開発を行った後、日本語教員を目指す大学生を対象に活用し、言い換えおよび書き換えデータの収集を行った。このデータをもとに、学生が本支援システムを利用することによる成果と課題を整理した。また、日本語教師教育科目で言語調整について学んだ大学生が PBL (Project-Based Learning) 型授業の一環で行った、新函館北斗駅に展示する観光用展示物のやさしい日本語への書き換えについても書き換えデータおよびインタビューデータを収集し、考察した(図 1)。同駅では、原文の下にそれぞれのパネルのやさしい日本語版を展示した(図 2, 3)。



図 1 展示風景



図 2 原文の展示例



図 3 書き換えたやさしい日本語版の展示例

平成 29 年度以降は、様々な観光用の情報提示方法の一つである、リトファスゾイルと呼ばれる円筒形掲示塔(図 4)に掲載されている難解な日本語をやさしい日本語に書き換え、その際にみられた特徴を考察した。書き換えた 4 名の学生には、平成 28 年度と同様に書き換え後にインタビューを行い、書き換えをとおして学生が学んだことを整理した。

さらに、平成 30 年度からは、「南北海道の文化財」を紹介しているウェブページに掲載されている観光用展示物の解説文をやさしい日本語に書き換え、データの蓄積を行っている。

学生 4 名による書き換えデータは、2015 年 12 月から 2016 年 2 月にかけて収集した。まず、学生は、学生 4 名



図 4 函館リトファスゾイル

のみで集まり書き換え作業を行った。その後、書き換えた文章を担当教員とともに検討した。その後学生は再び書き換え作業を続けた。文章によってはこの過程を二度行ったこともある。よって、一つの原文に二つまたは三つの書き換えデータが存在する。書き換え作業後に行った学生へのインタビュー結果も対象データとする。

#### 4. 研究成果

##### (1) 書き換えデータの分析結果

平成28年度は、新函館北斗駅に展示した観光用展示物の書き換えデータを分析した。やさしい表現に書き換える際すぐに思い浮かぶのは、同一の事物を指す、よりやさしい表現を選択する(たとえば「建設する」から「建てる」や「つくる」への書き換え)という手段である。一方、今回観察された効果的な書き換え例の多くは、同一の事物を異なる視点から捉え直したものであった。このような書き換えは、我々が言語を用いて事物を把握する際に発揮される認知能力をうまく利用した書き換えであり、今後の書き換え作業でも参考にすべき点である。

また、表現の難易度と情報量の問題についても今後につながる成果が得られた。受身から「～できる」を使った表現への書き換え(「日本初の鉄筋コンクリート寺院が建立される」「日本で初めての鉄筋コンクリートでできた寺ができました」)では、動作主が存在しない文となるため、表現のわかりやすさと引き換えに情報量の減少という問題が生じる。これは、やさしい日本語への書き換え全般に見られる問題であり、書き換えを行う者は常にわかりやすさと情報量のどちらを優先するかという難しい判断を迫られることになる。一方、対象のアフォーダンスを明示した書き換え(「現役最古の観覧車」「今でも乗ることができる、日本で一番古い観覧車」)は、わずかな文言の付加のみで、わかりやすさの向上とともに情報量の増加も可能となるという点で、理想的な書き換え例の一つといえることができる。

平成29年度は、「函館リトファスゾイレ」上の解説文を書き換えたものをデータとし、その特徴を分析した。語句レベルの書き換えにおいては、「同一の事物を異なる視点から捉え直す」タイプの書き換えが見られた点は28年度と共通しており、一方、漢語の複合名詞を和語の動詞や形容詞に書き換えている例が多く見られた点は29年度の顕著な特徴である。受身文の書き換えに関しては、受身文のガ格をそのままガ格で標するタイプの書き換えは28年度同様、29年度も観察されたが、それに加えて、能動文(相当)の表現に書き換えている例も多く見られた。以上のような、今回見られた顕著な特徴は、今回取り扱ったデータが歴史上の人物や出来事を説明する文章であったことに起因するものと考えられる。

平成30年度は、28年度と29年度の活動で得られたデータすべてを対象とし、書き換えに見られた創造的な側面(マニュアルを超えた工夫)に着目して再分析を行った。その結果、「より簡単な語への置き換え」や「一文を短くする」といった、学生が事前に作成したマニュアルに従った書き換え例が見られた一方、「異なる視点からの捉え直し」や「目的の明示」といった、マニュアルに記載のない工夫が見られた。このように、学生の創造的な活動が展開されたという点で、今回の取り組みは学生の主体的な学びを促すことができたといえることができる。その一方で、既存のマニュアルのみでは(書き換えを行う者の創意工夫なくしては)十分な書き換えができないことも明らかとなった。既存のマニュアルのように抽象的な規則の列挙に留まるのではなく、具体的な書き換え例を充実させることによって、マニュアルをより実践的なものに更新していく必要がある。

##### (2) 書き換えを行った学生へのインタビュー結果

本研究では、書き換えを実際に行った4名の学生に対してインタビューを行った。インタビューでは、書き換えた4名の全員が「原文の難しさ」「用語の書き換え方の統一」および「展示向けの情報量の調整」の3点についての難しさを指摘した。函館リトファスゾイレの原文には、難解な語彙や表現が多く、4人間の書き換え方にぶれが生じるという課題が残った。

これに加えて、インタビューでは、書き換えをとおして気づいたことや学んだことも尋ねた。その結果、学生は、書き換えをとおして学んだことを大学での他の学習活動やくらしの場面へ応用していることがわかった。学生の学びの応用例を3点述べる。1点目は、大学での他の学習活動、とりわけレポート作成への応用である。学生はこの書き換え活動を通して、「わかりやすく書くこと」「難しい語を避けること」「簡潔に書くこと」「口頭で発表するときには話し言葉にかえること」等気を付けるようになったと回答している。2点目は、聞き手への配慮についてである。学生は「話すときに伝わるかどうか考えるようになった」と回答している。また、「(書き換えを)わかりやすくできるようになった」「(書き換える際に)情報の取捨選択をするようになった」と回答した学生もいる。これは日常の会話において必要な配慮と技術である。少なくとも今回の書き換えを行った学生は、この書き換えをとおして、話し言葉におけるやさしい日本語の利用についても意識し、聞き手への配慮をこころがけるようになった。そして3点目は、普段のくらしの場面への応用である。インタビューを受けた学生が在住する地域には多くの外国人が観光に訪れる。学生は、道案内やアルバイト先の場面でやさしい日本語を使い始め、そこで成功体験をし始めていることがわかった。

##### (3) 研究成果のまとめ

本研究課題で行ってきた書き換え活動は、日本語教員をはじめとした、言語調整が必要な人



材の養成に有効であることと同時に、観光場面では、地域で活躍する人材の養成にもつながる可能性があることを示すことができた。さらに、地域の多様な現場での運用を行いつつ、書き換えマニュアルを具体化し、ワークショップの開催を含め、より多様な人々がやさしい日本語を活用できる環境を構築することが今後の課題である。

#### <引用文献>

佐藤和之(2004)「災害時の言語表現を考える やさしい日本語：言語研究者たちの災害研究」『日本語学』23巻10号, 明治書院, pp.34 - 45.

庵功雄(2013)「第1章「やさしい日本語」とは何か」庵功雄・イ ヨンスク・森篤嗣編『やさしい日本語は何を目指すか』ココ出版, pp.3-13.

#### 5. 主な発表論文等

##### [雑誌論文](計3件)

伊藤(横山)美紀、高橋圭介、伊藤恵、奥野拓(2019)「海外で活躍することを前提とした日本語教師教育におけるやさしい日本語の活用 地域における書き換え活動をとおして」『国際地域研究』第1巻, 査読無, 152-164.

伊藤(横山)美紀、高橋圭介、伊藤恵、長内一真、奥野拓(2018)「難解な日本語をやさしい日本語へ書き換える際にみられた特徴 書き換えデータとインタビューデータより」『人文論究』第87号, 査読有, 9-19.

伊藤(横山)美紀、高橋圭介、伊藤恵、木塚あゆみ(2017)「観光客向け展示物のやさしい日本語への書き換えに関する考察」『人文論究』第86号, 査読有, 1-8.

##### [学会発表](計3件)

伊藤(横山)美紀、伊藤恵、奥野拓、高橋圭介(2018)「日本語話者が日本語非母語話者を意識した書き換えを通して得る学びについての考察(An Examination of What Japanese Native Speakers Can Learn from Paraphrasing Activities Carried Out for Non-native Japanese Speakers)」ICJLE-Venezia (2018年日本語教育国際研究大会), 2018年8月4日, ヴェネチア(イタリア).

伊藤恵、長内一真、奥野拓、木塚あゆみ、伊藤(横山)美紀、高橋圭介(2016)「リトファスソイレとスマホアプリを用いたやさしい日本語並行表示による観光情報支援の試み」『観光情報学会第14回研究発表会』, 2016年11月25日, 近畿大学産業理工学部(福岡キャンパス)(福岡県・飯塚市).

伊藤(横山)美紀、伊藤恵、木塚あゆみ、高橋圭介(2016)「観光客向け展示物のやさしい日本語への書き換えに関する考察」BALI-ICJLE (2016年日本語教育国際研究大会)2016年9月10日, バリ(インドネシア).

##### [その他]

##### ホームページ等

これやさしいか 日本語のやさしさを判定します (本研究で拡張開発したやさしい日本語作成支援システム)

<http://koreyasashiiika.appspot.com/>

北海道の文化財(平成30年度からの書き換え対象)

<http://donan-museums.jp/>

#### 6. 研究組織

##### (1)研究分担者

研究分担者氏名: 伊藤 恵

ローマ字氏名: ITO, Kei

所属研究機関名: 公立はこだて未来大学

部局名: システム情報科学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 30303324

研究分担者氏名: 高橋 圭介

ローマ字氏名: Takahashi, Keisuke

所属研究機関名: 北海道教育大学

部局名: 教育学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 20455108

(2)研究協力者

研究協力者氏名：奥野 拓

ローマ字氏名：OKUNO, Taku

所属研究機関名：公立はこだて未来大学

部局名：システム情報科学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 30360936

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。